

Title	'ABU L-' ASWAD D-DU' ALIをめぐって
Author(s)	池田, 修
Citation	大阪外国語大学学報. 19 p.61-p.69
Issue Date	1968-06-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80312
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

'ABU L-'ASWAD D-DU'AL I をめぐって

池 田 修

アラビア語の文法学は、学問的体系という点から見て、アラブ側に於ける伝統的な文法学と、西欧オリエンタリスト達によって近代に確立された文法学の二つに大別される。前者は、古くより 'an-naḥw と呼ばれ、最近では、'al-qawā'id と呼ばれるようになったが、西欧的アラブ文法とは、いささか趣を異にするものである。それぞれ長所欠点があり、優劣は容易に論ぜられない。アラブ諸国が、文化的に西欧化ないしは、近代化の嵐の中にあって、教育の場で、アラブ文法といえば、伝統文法の事を意味する程、重要な地位を依然保持していることは、アラビア語の文法を研究する者にとって無視し得ない現象である。アラビア語の研究は、さまざまな角度から、なされなければならないが、アラブ伝統文法という、固有の学問体系に沿って研究を進めることの重要性も肯首されると思う。

本稿は、アラブ伝統文法が、コーランの研究の発展に伴って、イスラム生来科学の一部門として誕生した初期の事情を報告し、この場合、学祖的地位をしめると推定される 'abū l'aswad d-du'ali に関して、調査した結果を発表するのを目的とする。

アラビア語の文法学 (naḥw) は、コーランの研究から派生し、発展して来たイスラム生来の諸科学の一つとされている。⁽¹⁾

それは、Sibawaih⁽²⁾ の 'al-kitāb⁽³⁾ にみられる通りアラビア語の単語を 'ism (名詞類) と、fi'l (動詞類) および ḥarf (その他の辞詞) に三大別するところから出発する独自の学問体系である。イスラム外来科学の一つ、哲学 ('al-falsafah) においては、アリストテレスの学説を最初、シリア語経由でアラビア語に訳した。その際 kalām (言語) を 'ism と kalimah および ribāt に三分類したが、この考え方を文法の領域にアラブが取り入れたという説がある。即ち、文法学では、'ism はそのまま借用し、kalimah に対しては、fi'l という用語を用い、ribāt には、ḥarf という用語を当て哲学の領域で用いる用語と一線を画したというものである。⁽⁴⁾ このようにアラブ文法における品詞分類という取り組み方は、ギリシャ哲学に負うものだとするヨーロッパの学者もあるが、充分証明されていない。

アラビア語の文法学は、語末母音の変化 (ないしは不変化) に著しく注目する特徴がある。これは、アラビア語が、子音文字で書かれているためでもあるが、文法学がコーランに正確な母音

点を附する事より発展した事情に由来するものである。ギリシャ哲学の影響は、コーランに母音符号を打つ段階では、感ぜられず、後に、バスラとクーファの両学派の論争の過程で、主としてバスラ学派によって理論的武装の手段として文法学に取り入れられたと判断するものである。従って、アラビア語の文法学は発生的にみて、生来科学の一つとして独自性を主張出来るものである。

アラビア語の文法書は、数多く書かれているが、そのいずれもが、現在まで伝えられている Sibawaih の 'al-kitāb に多かれ、少なかれ依拠している。彼以前の、これに匹敵する文法学書は、現存しない。しかし、これが、彼以前に文法学ないし、その学者が存在しなかった事を示すものではない。

'al-kitāb の中においても、しばしば Sibawaih は、先行諸学者の説を引用している。主要なものをみると、

- 1) 'Īsā bn 'umar th-thaqafī
- 2) Hammād bn salmah
- 3) Yūnis bn ḥabīb d-dābi
- 4) 'Al-khalīl bn 'aḥmad l-farāhīdī
- 5) Hārūn bn mūsā l-'atki
- 6) 'Abū zayd l-'anṣālī
- 7) 'Abū l-khitāb l-akhfash

の7人の学者からの引用箇所が多いのが目を引く。⁽⁵⁾

Sibawaih 以前に、相当多くの文法学の成果があったことは、明らかである。彼は先行諸学者の学説を、整理、統合して、'al-kitāb を完成したのである。'al-kitāb のすべてを Sibawaih の独創的業績に帰することは出来ないであろう。

アラブ文法学が発祥したのは、バスラ ('Al-baṣrah) に於いてである。Sibawaih の時代には、クーファ ('Al-kūfah) に於いて、'Al-kisā'i に代表される学派が存在し、Sibawaih を長とするバスラ学派と文法論争を激しく展開していたことは各種の資料に伝えられている。しかし両者の師 'Al-khalīl bn 'aḥmad の段階では、クーファ学派の存在は確認出来ない。'Aḥmad 'amin は、「文法学は、先づ、バスラの地で発生し、約100年遅れて、クーファに、独自の学派が生まれた」⁽⁶⁾と述べている。

Mahdī l-makhzūmī は、「文法学のクーファ学派は、'Al-kisā'i および弟子の 'Al-farrā'i を学祖として生まれたもので、それ以前には、学派として存在せず、文法学は、バスラを中心に発達していた。'Al-kisā'i も、Sibawaih も、'Al-khalīl bn 'aḥmad を師として、バスラで文法学を修め、後に 'Al-kisā'i は、クーファに帰って、クーファ学派の指導者となり、バスラ学派と対抗するようになった」と説いている。両学派が、その後、どのような問題で、どのような学者によって、論争したかは、各種のアラブ側資料に断片的に伝えられている。'Al-'anbārī のように、両学派の対立した問題を整理して、一冊の本にまとめた学者もある。彼の著作は、'al-'insāf fi

l-khilāf baina n-naḥwiyyīn l-baṣriyyīn wa l-kūfiyyīn (バスラ文法学者達とクーファ文法学者達の間における論点を切る) というもので、今日に伝えられている貴重な資料となっている。

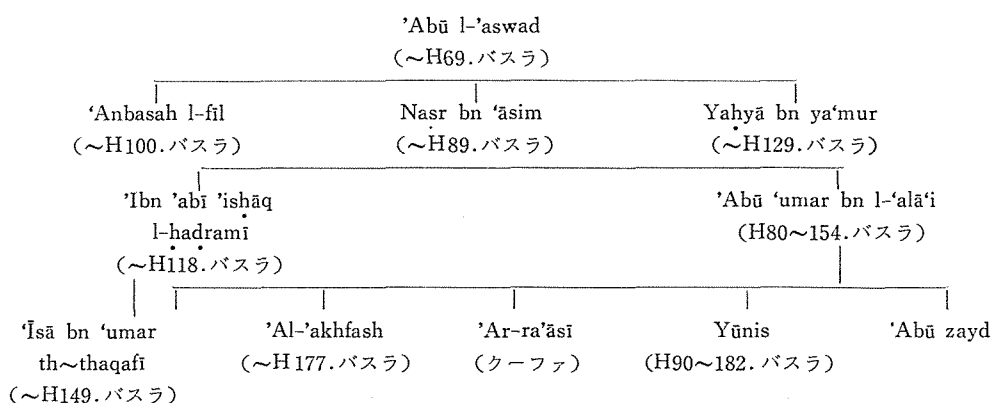
Sibawaih 以前の事情に関しては、不明な点が多い。アラブ側資料に専ら頼らざるを得ないが、信頼し得ないものも多く、多分に主観的とならざるを得ない。'Ibn n-nadīm の 'al-fihrist, 'Ibn I-'anbārī の nazḥah l-'albā', 'Ibn khallikān の wafayāt l-'a'yān, 'As-suyūṭī の bughyah l-wi'āh, 'Abū ṭ-ṭayyib の murātib n-naḥwiyyīn, 'Az-zubaydī の ṭabaqāt n-naḥwiyyīn, 等が、アラブ文法学史を再構成する基礎資料として注目される。

これ等の資料を残した学者の多くが、準拠したと思われる 'Aṣ-ṣirāfi⁽⁸⁾ の書き残したところの、'akḥbār n-naḥwiyyīn l-baṣriyyīn によると、最初に文法の基礎をもうけた者として、

- (1) 'Abū l-'aswad d-du'ālī
- (2) Naṣr bn 'āsim d-du'ālī
- (3) 'Abd r-raḥmān bn huramz

の3人のうちいずれかという事になっているが、多くの者が、'Abū l-aswad 説を支持していると述べている。

'Aḥmad 'amīn もこの説を採用して、文法学者の人脈を次のように図示している。⁽⁹⁾



この表は、Howell の Arabic Grammar を参考にし、各種の資料によって、補正を加えて、'Aḥmad 'amīn が作成したもので、初期の有名な文法学者の系統を要領良くまとめている。図示している次の時代が、'Al-khalil bn 'aḥmad から Sibawaih や Al-kisā'i 等⁽¹⁰⁾ へ続く。一方、Muhammad l-mun'im 等は、バスラ学派を時代順に6層に分け、第1期 ('aṭ-ṭabaqāt l-'ūlā) の学者を 'Abū l-'aswad (H69) に次いで、

- 1) Naṣr bn 'āsim (~H89)
- 2) 'Abū dāwud 'abd r-raḥmān (~H117)
- 3) 'Anbasah l-fil (~H100)
- 4) 'Abd l-lāh bn 'abī 'ishāq (~H117)
- 5) Yahyā bn ya'mur (H129)

とし、第2期の学者を、

- 1) 'Īsā bn 'umar th~thaqafi (~H149)
- 2) 'Abū 'umar bn 'alā' (~H154)
- 3) 'Abū l-khitāb l-'akhfash (~H157)

次いで第3期の 'Al-khalil bn 'aḥmad 第4期の Sibawaih 等へ引きつがれたとしている。

'Abū l-'aswad を文法学祖とみることに對して、'Aṣ-ṣirāfi は、次のような2つの異説があったと伝えている。

1) Hishām⁽¹¹⁾ がカリフとなっていた時代に、'Ibn laḥī'ah (~H173) という者が、「'Abd r-raḥmān bn huramzこそ、最初に文法を説いた者である」と語った。⁽¹²⁾

2) khālīd l-hidhā' (~H141) が、Maḥbūb l-bakrī に 'awwalu man wada'a l-'arabīyah (最初にアラビア語のシャクルをつけたもの) は、Naṣr bn 'āsim である」と述べた。

両者は、純然たるアラビア語を話し、コーランの読誦に長じていたことも 'Aṣ-ṣirāfi は伝えているが、'Abū l-'aswad にまつわる逸話に比較すると、貧弱で、信用するに足らず、材料不足である。後世の学者が、こぞって 'Abū l-'aswad 学祖説に傾くのも由なしとしない。

(2)

'Abū l-'aswad は、du'il 族出身の詩人で、父は、'Alī bn 'abī ṭālib (4代目カリフ) のアンサーの1人であった。彼は、'Alī に従い、Ṣiffīn での Mu'āwīyah 軍との決戦 (A.D657) に参加している。A.D681年に、'Aṭ-ṭā'ūn という地で死亡したといわれる。⁽¹³⁾ Sibawaih は、A.D770年頃死亡したものとみられるので、アラブ文法学は、Abū l-'aswad から一世紀強を経て、8世紀末には、'al-kitāb を生みだすまで発展することになる。

'Abū l-'aswad が 'awwalu man rasama n-naḥwa (最初に文法を描いた者) とか、'awwalu man wada'a l-'arabīyah (最初に“コーラン”にシャクルを打つたもの)⁽¹⁴⁾ と言われるのは、どのような理由によるものであろうか。

'Aṣ-ṣirāfi は、まず、'Abū 'ubayd ma'mar bn l-muthannā (~H209.言語学者) その他の言い伝えを次のように述べている。

'Abū l-'aswad は、文法の手ほどきを、4代カリフ 'Alī より学んだ、この事を口外しなかったのであるが、Mu'āwīyah が 'Alī を倒し、ziyād bn 'abihi をバスラとクーファの知事として送り込んで来た時、ziyād は、'Abū l-'aswad を呼び寄せ、人々に役に立つものを著わし、コーランの理解を助けるよう工夫せよと命じた。本来アリー党であった彼は、この命令を一たん拒んで、引き下ったのであるが、人々がコーラン(9-3)にある文章を、'anna l-lāha bari'un mina l-mushrikīna wa rasūluḥu 「アッラーは、多神教徒共とは無縁のもの、使徒として同じこと(アッラーと同様彼等とは無縁である)

と、読むべきを、本文中 rasūluḥu を、rasūlihi と属格に読んでいるのを耳にした、(属格

に読むと、アツラーは、多神教徒とも、使徒とも無縁であるの意となる)。そこで彼は、「人々の為すべき事にあらず」と叫んで、ziyādのもとへ戻り、命令の通り従うと伝え、有能な書記一名を要求した。ziyād が選んだ1人目の書記は、'Abū l-'aswad の気に入らず2人目のが気に入った。この書記に向って、「もし私の口が fataḥat (3人称, 女性, 単数, 完了形動詞) なら文字の上に点を一つ打て、もし, dammat なら文字と文字の中間上に点を一つ打て、もし kasarat なら、文字の下に点を一つ打て、これ等の状態が長目であれば、点は2つならべて打て、」と命じた。この調子でコーランに点を打ちおえたとある。fataḥat は、口が開いて a 母音を示すことであり、dammat が u 母音、kasarat が i 母音、点2つが長母音を示すものだったことは、想像にかたくない。この逸話の前半は、R, A, Nicholson も 'Ibn khallikān より引用して紹介している⁽¹⁵⁾が、筆者は、前半より、後半の母音点をコーランに打ったという伝言を重視するものである。

'Ibn l-'anbārī は、多少異った話を伝えている。

['Alī は、或る時、'Abū l-'aswad に書状を送り、その中で、'al-kalām (文) は、すべて 'ism (名詞類) と fi'l (動詞類) と ḥarf (その他の辞詞) よりなる。'ism は事物の名称、fi'l は、性状を示し、ḥarf は意義を明確にするものである。'ism には3種あり、第1は、zāhir (実名詞) 第2は、Muḍammir (代名詞) 第3は、それ以外のものである。

'Abū l-'aswad は、'Alī の書状にある説に、'al-'atf (接続詞) と 'an-na't (形容詞) 'at-ta'ajjub (感嘆) 'al-'istifhām (疑問) の各章を加え、更に lakinna (しかしという意) を除く 'inna wa 'akhawātuhā の項目⁽¹⁶⁾を追加した上で、'Alī に提出した、'Alī は、これをみて、lā kinna を 'inna wa 'akhawātuhā に加えるよう命じた。'Abū l-'aswad は、その通りにした⁽¹⁷⁾

'Abū l-'aswad にかかわるこの種の逸話は、この他にも幾つかあるが、'As-sīrāfi の伝えるところを中心に整理してみると、次のようになる。

'Abū l-'aswad に文法学の基礎を確立するよう命じた者については、

- 1) 'Alī bn 'abī ṭālib
- 2) 'Umar bn l-khitāb
- 3) ziyād bn' abīhi

の3説がある。

又、彼が文法学に着手する動機となったのは、

- 1) 'anna l-lāha bari'un mina l-mushrikīna wa rasūlihi という誤った読み方を聞いたから (前出)
- 2) 彼の娘が彼に向って、「お父さん、何んと良いお天気でしょう!」と言おうとして、mā 'ahsanu s-samā'i yā 'abati (お父さん空の中で最も良いものは何か) と発音した、彼は質問されたと思い、「星だ」と答えたら、質問したのではないと娘が言った。そこで、mā 'ahsana s-samā'a が正しいと教えた。これがきっかけになった。尚、娘との会話は、yā 'abati mā 'ash addu l-ḥarri (お父さん、最も暑いものは何か) であったとも云われる。娘は、

「何んと暑いことでしょうお父さん」と云ったつもりであった。彼が、「太陽がカンカンに照りつけ、地面が焼けついている所へ立っていることだ」と答えたので娘が、本意をつけ、それなら、*yā 'abati mā 'ashadda l-harra!* と云えと教えた°

3) ある時人々が、*lā ya'kuluhu 'illā l-khātī'ina* と述べているのを耳にした、これは、「彼は、罪人達だけ食べた」という意味で、正しくは、*lā ya'kuluhu 'illā l-khātī'ūna* (それを食べたのは、罪人達だけだった) とすべきである。

4) 'Abū l-'aswad は、バスラの人々のナマリのひどいのに閉口し、*ziyād* に、正常化をはかりたいと申し出た、*ziyād* は一たん断ったが、ある時、*ziyād* のもとへある男がやって来て、「父が死んで、我々息子を残しました」というのを、*tuwuffiya 'abānā wa taraka banūnā* (正しくは、それぞれ *'abūnā, banīnā*) と語った。*ziyād* は、'Abū l-'aswad を直ちに呼び寄せ、彼にアラビア語正常化の工夫を命じた。⁽¹⁸⁾

以上が、'Abū l-'aswad が文法へ手を染める動機になった事件としてつたえられているものである。

彼と 'Alī の関係、特に 'Alī 学祖説的な点は、どうも、肯首しかねる。'Alī の時代に、この逸話にあるような、品詞分類的なことが行なわれていたとは、考えられないからである。コーランの読み方、解釈、外来語かそうでないかぐらいの程度は研究されていたかもしれないが、'Alī も、'Abū l-'aswad 自身も、'Ibn l-'anbālī のつたえるようなほど、文法学を進めては居なかった。他の分野にもみうけられる通り、すべての成果を 'Alī に帰そうとするシーア派的作り話しのニオイが強く感じられる。しかし、'Abū 'ubayd の語ったという話の中で、コーランに点を打って、母音符号らしきものを打ったという点は、当時の状況に照して、最も有りそうな事に思える。

文法へふみ切る動機となった話題の内にもある通り、バスラの人々の言葉が、アラビア語の正則性をだんだん無視して、乱れていた。そこで、コーランの読み方を、読む者によって変るようなことのないよう何ん等かの工夫をする必要があった。'Abū l-'aswad は、これに応じて、コーランに母音点を打って子音文字だけからなる欠点を補った。と考えるものである。

現在のアラビア語の母音符号は、'Al-khalīl bn 'aḥmad の工夫になるものと言われるが、'Abū l-'aswad がコーランに打った母音点は、全く別種のものである。

現在のアラビア語の文字には、点を有するものとそうでないものがある。Abū l-'aswad の発明した“点”を打つと、文字本来の点と、母音を示す点とが、きわめてまぎらわしい。しかし実際には、この混乱はなかったのである。

'Ibn khallikān によると、⁽¹⁹⁾'Al-ḥajjāj bn yūsuf がイラクの知事となった当時、文書が増え、良くにた文字、例えば、*nūn* も、*bā'* も、*tā'* も、すべて点がないので、同型、ために多くの支障が生じた。そこで、文字の改革を命じた。これに Naṣr bn 'āsim (前出) が着手、現在のような、点を存する文字を発明した。その時までは、'Abū l-'aswad の母音点が特に支障とならなかったとみられる。

'Ibn qutaybah d-d ainūrī (A.D828~889) も、その大著、'al-ma'ārif で、'awwalu man wada'a l-'arabīyah は、'Abū l-'aswad であったと述べている。彼の言う 'al-'arabīyah は、多分、コーランに、母音符号を打ったということであろう。⁽²⁰⁾'Ibn qutaybah は、コーランに母音点を打った事柄と、文法の基礎を確立したという2つの意味をもたせているのかも知れない。アラビア語の文法が、母音に、神経質な学問体系であるところからみても、又、たとえコーランという限られたものを対象とし、簡単な符号であっても、'Abū l-'aswad の業績を、文法学の出発点におくことに特に異議はないと考える。

(3)

もっとも、'Abū l-'aswad が単にコーランに母音点を附しただけのことであったのか、それより一歩進み、コーランのみならずアラビア語一般を対象として、ある程度の学問体系をたてたのか、実は不明なのである。しかし、コーランに簡単な母音点を打ち、多分コーランから大きく離れることはなかったと推定される。彼が文法を手掛ける動機となった逸話において、誤った読み方、話し方を指摘しているが、“感嘆文”としての法則性を体系づけていたのか、“主語は主格で、その符号が，ḍammahである”とかのように、一般的な理論を導びき出していたか、一際、不明である。少なくとも、個々の文法現象には、目をとめていたものとみえる。それぞれの現象から、法則性を求め、専門用語を用いて、学問体系を発展させたのは、彼以後の事であろう。彼がコーランに母音点を打ってより後、当然、世の学者によって再検討が加えられ、「この場合は、何故 a 母音であるか、」云々の過程がくりかえされたものと推定される。

しかし、ṭabaqāt sh-shu'arā' の著者、'Ibn sallām は、バスラの人々は、an-naḥw に関して、他より早くから研究していた。そして、アラブと外国の言葉に関心を払っていた。最初に al-'arabīyah⁽²¹⁾ を符し、文法の章節をもうけ、方法をたて、qiyās (類推) を文法に適用した者は、'Abū l-'aswad d-du'ali であった。彼はバスラの人で、アリー党であった。彼が文法に手を染めたのは、アラブの言葉が乱れ、純粋性がそこなわれ、人々が間違った発音をするようになったからである。彼は、'al-fā'il, 'al-maf'ūl, 'al-mudāf, ḥurūf l-jarr, 'ar-raf', 'an-nasb, 'al-jazm 等を説いた⁽²²⁾と述べているのである。'Ibn sallām の言をどう解すればよいだろうか。ここで述べられている al-fā'il 以下一般的な問題に適用し得る用語の使用、定義を、'Abū l-'aswad が理解していたとは、思えない。彼の弟子、主としてバスラ学派の第1期、第2期に活躍した学者達が、コーランおよび、アラビア語一般を対象として、見出した法則性なり、用語なりを、'Abū l-'aswad の打ったコーランの母音点に当てはめてみて、良く一致することに気付き、彼等の研究成果の一部を、'Abū l-'aswad に帰せしめたのではないだろうか。

'Abū l-'aswad は、「もし、私の口がある文字を発音する時開けば、点を文字の上に一つ打て……」というような簡単な方法で、しかも、後の学者が発明した法則を彼に帰せしめるに足るほどの正確さでコーランに母音点を打ったものとみえる。

'Abū l'aswad がコーランに母音点を打ったあと、彼の弟子、その孫弟子などによって、コーランを土台にし、更に一般アラビア語を対象として、文法学は発展して行く。その成果が結集されたのが、第2期を代表する学者 'Īsā bn 'umar th-thaqafi の書いた⁽²³⁾ 'al-jāmi' と al-'ikmāl という2書であったと推定することは、それほど困難ではない。2書とも今日に伝わっていないが、それが、Sibawaih の 'al-kitāb に先行する、一期を画する文法学の大著であっただろうことは、第3期を代表する 'Al-khalil bn 'aḥmad をして、

'Īsā bn 'umar の業を除き文法は、すべて古びた。

一つは、'kmāl, 今一つはjāmi', 2書は、人々の太陽であり、月である。
と感嘆せしめていることでもうかがいしることが出来る。⁽²⁴⁾

Sibawaih は、この2書に集められた、文法学の成果を、師の 'Al-khalil bn 'aḥmad その他の学者から引きつぎ、彼の学説ともども、'al-kitāb に盛り込んだものと推察される。⁽²⁵⁾

註

- (1) R.A.Nicholson, a literary history of the Arabs, p.282—283.
- (2) sibawaihe と、sibbuwaih と、又、sibbuwī とよばれる、諸説がある。多分ベルシャの shirāz の近く 'Al-'abyad で生まれ、後バスラに移り、ここで文法学を修めたものとみえる。H-180年頃、故郷で死亡。尚 'Al-munjid には、バスラで生まれたとあるがこの説は採らない。
- (3) P.K.Hitti, History of the Arabs. p.242. Nicholson p.343. 他、多くの歴史書が言及している。アラビア語の文法書として、空前絶後の著作とみなされている。
- (4) 'Aḥmad 'amīn : duḥā l-'islām II-p.292.
- (5) khadijat l-ḥadīthi : kitāb sibawaih wa shurūḥuhu p.33—41. Ma'ḥdī l-makhzūmī : madrasat l-kūfah 序文。
- (6) duḥā l-'islām II-284.
- (7) madrasat l-kūfah p.74~79.
- (8) 文法学者、Sibawaih の al-kitāb の研究者 H-368年死亡、バグダッドの ar-rusāfah 地区モスクの muftī になった人。(9) duḥā l-'islām II-284, E.I.新版 1—106.
- (10) 彼は、Tahā muḥammad z-zaiti と共同で、'Aṣ-ṣirāfi の著書の注釈を出版している。両者とも、'Al-'azhar の学者、両者のつけている各学派の死亡年は、何によったか不明。また、文法学者の師弟関係が明らかでない。
- (11) Hishām bn 'abd l-malik (724~743) の事、ウマイヤ朝カリフ。
- (12) 'Aṣ-ṣirāfi : p.16.
- (13) 'Al-munjid.
- (14) 'al-'arabī yah とは、いわゆる 'ash-shakl を打つ事のように考えられる。
- (15) 'Aṣ-ṣirāfi p.12, Nicholson p.342.
- (16) 'inna, 'anna, ka 'anna, la'alla, lākinna, laita 等は、名詞文章に先行して、'al-mubtada' (名詞文章

の主語)を対格とし、述語を主格とする共通の性質があるため、'inna とその姉妹語として、一章をなす。

(17) na zhat l-'al bā' 5.

(18) 'Aṣ-ṣirāfi 12—16.

(19) 'Ibn khallikān : wafayāt l.'a'yān I -175.

(20) 註(14) 参照。

(21) 註(14), 同(20)参照。

(22) 'al-tā'il は、動詞文章の主語, 'al-maf'ūl は, 'al-maf'ūl bihi とよばれ, その目的語 'al-muḍāf は, 他の属格名詞に限定されている 'ism をいう。ḥurūf l-jarri は(単数 ḥarf jarr) min, li, 'alā 等の Preposition を指す。'ar-raf' とは主格, 'an-nasb は対格, 'al-jazm は、動詞の要求法を意味するが, アラブ流に考えると, 『動詞の属格』である。名詞の属格は jarr として区別する。

(23) 'Aḥmad 'amin の図表にもみえる通り, バスラの人で, 彼の弟子には, al-khalil bn 'aḥmad やクーファ学派の祖と伝えられる(反対論もある)'Abū ja'far ra'āsī, が有り, また 'Abū zaid や Sibawaih さえ, 一時彼の教えを直接受けたといわれる。

(24) Khadijah l-ḥadīthī p.34.

(25) 紙幅の関係で, Sibawaih とその大著 'al-kitāb には詳細にふれなかったが, いずれ稿を改めたい。